

## 本書の特色

この本は、中学3年の冬休み前までの学習内容を中心につくられたテキストです。基本的な力をつける問題が中心になっていますから、今まで学んだことの基礎を身につけるために効果的です。

読解の単元は、最初の2ページで文章中にどんなことが書かれていたかをおさえたとともに、次の2ページで、同じ文章を扱った確認問題に取り組むという構成になっています。同じ文章を二度読むことで、内容を正確に読み取る力をつけましょう。さらに次の2ページで、確認問題の類題に取り組むことで、各課で扱う内容を着実に身につけることができます。

## 本書の使い方

- **学習のポイント**……各課で習得すべき学習内容が示されています。
  - **文章の流れをつかもう**……文章のあらすじをおおまかにつかむコーナーです。
  - **内容をとらえ直そう**……文章の内容を整理し直すコーナーです。
  - **確認問題**……前の2ページと同じ文章を扱っています。「文章の流れをつかもう」「内容をとらえ直そう」で確認した内容を思い出しながら解きましょう。
  - **演習問題**……「確認問題」とは違う文章で、同じレベルの問題を扱っています。
  - **漢字のトレーニング**……重要漢字の読み書きを確認しましょう。
  - **入試実戦問題**……入試問題による、この本の総まとめになっています。
- ※ **読解以外の単元**……「整理しよう」「例題」を通して重要事項をおさえ、「演習問題」でさらに理解力を深めましょう。

## もくじ

〈中3国語〉

1	説明的文章(1)	2
2	説明的文章(2)	8
3	小説文(1)	14
4	小説文(2)	20
5	随筆文	26
6	古典	32
7	詩歌	38
8	情報・作文	44
	漢字・語句・文法	50
	入試実戦問題①(説明的文章)	54
	入試実戦問題②(文学的文章)	56
	入試実戦問題③(古典・詩歌・情報)	58

# 6 古典

## 学習のポイント

- ・歴史的かなづかいを現代かなづかいに直す。
- ・省略された主語や、会話を的確にとらえる。
- ・返り点と送り仮名を理解する。

## 整理しよう

### 1 かなづかいの直し方

- ①は・ひ・ふ・へ・ほ↓わ・い・う・え・お (※語頭と助詞をのぞく)  
 例 かは↓かわ(川) うへ↓うえ(上)
- ②ゐ・ゑ・を↓い・え・お  
 例 んど↓いど(井戸) こゑ↓こえ(声)
- ③ア段音+う↓オ段音+う  
 例 やうす↓ようす(様子) まうす↓もうす(申す)
- ④イ段音+う↓イ段音+ゆ  
 例 りうは↓りゆうは(流派) かしふ↓かしゆう(歌集)
- ⑤エ段音+う↓イ段音+よう  
 例 けふ↓きよう(今日) てふ↓ちよう(蝶)
- ⑥ぢ・づ・くわ・ぐわ・む↓じ・ず・か・が・ん  
 例 みづ↓みず(水) くわし↓かし(菓子)

### 2 主語のとらえ方

- ①省略されている「は」「が」をおぎなう。
- ②「が」の意味で使われている「の」をさがす。
- ③前後の文脈から判断する。

### 3 会話のとらえ方

- ①会話部分は「と」「とて」「など」といった引用を表す語の直前まで。
- ②会話部分の前後に、「言ふやう、〜と言ふ」「申すやう、〜と申す」など、「言ふ」「申す」という言葉が繰り返し用いられていることも多い。

### 4 漢文↓書き下し文への直し方

- ①返り点……レ点……一字下から上へ返る。 ② ①
- 一二点……二字以上、下から上へ返る。 ③ ②
- ②送り仮名……右下のカタカナはひらがなに直す。 ③ ①
- ③その他……「不」は「ず・ぎ」と読み、ひらがなに直す。 ③ ②
- 「而・於」など、読まない字は書き下し文には書かない。

例題

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか片雲の風にさそはれて漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣をはらひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に白河の関越えむと、そぞろ神の物につきて心をくらはせ、道祖神の招きにあひて、取るもの手につかず、股引の破れをつづり、笠の緒付けかへて、三里に灸すゆるより、松島の月まづ心にかかりて、住めるかたは人に譲り、杉風が別墅に移るに、

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家  
表八句を庵の柱に懸け置く。

(松尾芭蕉「おくのほそ道」より)

(注) 百代：永遠 江上の破屋：隅田川のほとりのあばら家

そぞろ神：人の心を惑わせる神 道祖神：道路の守り神

杉風が別墅：芭蕉の古い弟子(杉山杉風)の別荘

表八句：百句続ける連句の初めの八句

□(1) 線①「くわかく」、②「とらへて」を現代かなづかいに直しなさい。

①

②

□(2) 線③「越えむ」の口語訳として最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

- ア 越える イ 越えない ウ 越えまい エ 越えよう

□(3) 線④「住めるかたは人に譲り」とありますが、その他にどのような旅支度をしましたか。その様子を表している部分の最初と最後の三字を、

文章中から書きぬきなさい。

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

□(4) 次の文のA、Bに入る最も適当な言葉を、文章中から書きぬきなさい。また、Cに入る最も適当な言葉を、ア～エから選びなさい。

作者である芭蕉は、人生そのものをAであるにとらえ、尊敬するBの生き方を思い、自分を見つめ、「おくのほそ道」のようなC文を書き、推敲を重ねた。

- ア 紀行 イ 日記 ウ 物語 エ 随筆

A

B

C

兵 刃 既<sup>ニ</sup>接<sup>シ</sup>、棄<sup>テ</sup>甲<sup>ヲ</sup>曳<sup>キテ</sup>兵<sup>ヲ</sup>而<sup>ハ</sup>走<sup>ル</sup>、或<sup>ハ</sup>百<sup>ニ</sup>步<sup>ニシテ</sup>而<sup>ハ</sup>後<sup>ニ</sup>止<sup>マル</sup>、或<sup>ハ</sup>五十<sup>ニ</sup>步<sup>ニシテ</sup>而<sup>ハ</sup>後<sup>ニ</sup>止<sup>マル</sup>。以<sup>テ</sup>五十<sup>ニ</sup>步<sup>ニシテ</sup>笑<sup>ハハバ</sup>百<sup>ニ</sup>步<sup>ニシテ</sup>則<sup>チ</sup>何<sup>カ</sup>如<sup>ク</sup>。

【書き下し文】 兵刃既<sup>へいじんすで</sup>に接<sup>せつ</sup>し、走<sup>はし</sup>る、或<sup>ある</sup>いは百<sup>ひゃく</sup>步<sup>ぽ</sup>にして後<sup>のち</sup>止<sup>と</sup>まる、或<sup>ある</sup>いは五十<sup>ごじゅう</sup>步<sup>ぽ</sup>にして後<sup>のち</sup>止<sup>と</sup>まる、或<sup>ある</sup>いは五十<sup>ごじゅう</sup>步<sup>ぽ</sup>にして後<sup>のち</sup>に止<sup>と</sup>まる。五十<sup>ごじゅう</sup>步<sup>ぽ</sup>を以<sup>もつ</sup>て則<sup>すなわ</sup>ち何<sup>いかん</sup>如<sup>く</sup>。

【口語訳】 戦場で両軍すでに戦う時に、兵士たちはよろいを捨て、武器を引きずり逃げ出した。ある者は逃げた後、百歩で立ち止まり、ある者は五十歩で立ち止まった。五十歩逃げた者が、百歩逃げた者ののしり笑ったとすれば、どうであろうか。

(『孟子』より)

□(1) 線①「棄<sup>テ</sup>甲<sup>ヲ</sup>曳<sup>キテ</sup>兵<sup>ヲ</sup>」、②「笑<sup>ハハバ</sup>百<sup>ニ</sup>步<sup>ニシテ</sup>」を書き下し文に直しなさい。

①

②

演習問題

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

この禪師、武蔵野の野中にて、水のほしかりければ、小家の見えるに立よ  
りて、水のほしきよし云けるを聞いて、まどの中より、端割れたるひきれに水  
入、十二、三許なる小童の、指出したるをとるとて、

② もちながらかたわれ月に見ゆるかな

と云ければ、小童とりもあへず、

まだ山の端を出もやらねば

と云ける。わりなくこそ。

〔沙石集〕より

(注) 禪師：禅僧 端：はし、ふち ひきれ：お椀 許：ほど、くらい

もち：「持ち」と「望(満月)」とをかけた掛詞 かたわれ月：半月

とりもあへず：たちどころに わりなくこそ：思いもかけないことだ

□(1) 〰〰〰線「とりもあへず」を現代かなづかいに直しなさい。

[Blank box for answer 1]

□(2) 〰〰〰線ア～エの「の」の中で、他とは異なる意味を持つ「の」を選びな  
さい。

[Blank box for answer 2]

□(3) 〰〰〰線①「云けるを聞いて」とありますが、これに主語を補って現代語訳  
したものとして正しいものを、ア～エから選びなさい。

- ア 禪師が言ったのを小童が聞いて
- イ 小童が言ったのを禪師が聞いて
- ウ 筆者が言ったのを禪師が聞いて
- エ 筆者が言ったのを小童が聞いて

[Blank box for answer 3]

□(4) 〰〰〰線②「もちながらかたわれ月に見ゆるかな」について、A、Bに答  
えなさい。

A 「かたわれ月」とは何をたとえたものですか。文章中から十字以内で  
書きぬきなさい。

[Blank box for answer 4A]

B 掛詞に留意して、この部分の意味を考えると、  
る言葉在五字以内で書きなさい。

望月であるのに、  
のは半月に見えることだよ

[Blank box for answer 4B]

□(5) 〰〰〰線③「わりなくこそ」の後に省略されている言葉を補うとき、正し  
いものをア～エから選びなさい。

- ア 覚ゆ イ 覚ゆる ウ 覚多よ エ 覚ゆれ

[Blank box for answer 5]

□(6) 筆者はどのようなことに感動していますか。最も適当なものを、ア～エ  
から選びなさい。

- ア 田舎の貧しげな家の十二、三歳ほどの子どもが、思いがけず即座に一  
杯の水をくれたこと。
- イ 田舎の貧しげな家の十二、三歳ほどの子どもが、思いがけず即座に和  
歌をふまえて返答したこと。
- ウ 田舎の貧しげな家の十二、三歳ほどの子どもが、思いがけず即座に割  
れたお椀を用意したこと。
- エ 田舎の貧しげな家の十二、三歳ほどの子どもが、思いがけず即座に月  
見に興じたこと。

[Blank box for answer 6]

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

人に存するものは、眸子①より良きはなし。眸子は、其の悪を掩おほふことあたはず。胸中正しければ、則ち眸子あき瞭すならかなり。胸中正しからざれば、則ち眸子②。其の言を聴きて、其の眸子を觀みれば、人焉③くんぞ隠さんや。  
〔孟子〕より

(注) 人に存するものは…人に備わっているものでは 眸子…瞳  
 掩おほふことあたはず…おおい隠かくすことができない

□(1) □に入る最も適当な言葉を、ア～エから選びなさい。

- ア 安らかなり イ 近し ウ 澄すめり エ 暗し

□(2) —線①「眸子より良きはなし」の現代語訳を書きなさい。

□(3) —線②「其の眸子を觀れば」は、漢文では「觀其眸子」と書いてあります。この漢文に返り点をつけなさい。

觀 其 眸 子

□(4) —線③「焉くんぞ隠さんや」は、「隠すことができない」という意味ですが、何を隠すことができないのですか、文章中から二字で書きぬきなさい。

□(5) 本文の内容に最も近い慣用句を、ア～エから選びなさい。

- ア 目は心の鏡      イ 目の色を変える  
 ウ 目から鱗うろこが落ちる      エ 目に入れても痛くない

3 次の漢詩を読んで、あとの問いに答えなさい。

	江雪 <small>こうせつ</small>		柳宗元
千	山鳥飛 <small>フコト</small> 絶 <small>エ</small>	千	山鳥飛ぶこと絶え
万	径人蹤 <small>しよう</small> 滅 <small>ス</small>	万	径人蹤滅す
孤	舟蓑 <small>き</small> 笠 <small>りょう</small> 翁 <small>おうち</small>	孤	舟蓑笠の翁
独 <small>り</small>	釣 <small>つ</small> 寒 <small>かん</small> 江 <small>こう</small> 雪 <small>せ</small>		

(注) 万径…すべての小道      人蹤…人の足あと  
 蓑笠…「みの」と「かさ」(ともに雨や雪を防ぐもの)

□(1) この漢詩の詩型を、ア～エから選びなさい。

- ア 五言絶句      イ 五言律詩  
 ウ 七言絶句      エ 七言律詩

□(2) □にあてはまる、—線「独り釣つ寒かん江こう雪せ」の書き下し文を書きなさい。

□(3) この詩にはどのような情景が描かれていますか。最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

- ア しんしんと雪の降り続く朝、旅立つ友人を見送っている情景。  
 イ 故郷を離れた旅人が、雪山を眼前に一人たたずんでいる情景。  
 ウ 見渡すかぎりの雪景色の中で、小舟が小川を行き来する情景。  
 エ しんしんと降る雪の中、老人が川で一人釣りをしている情景。

4 次の漢詩と書き下し文、古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

I 有梅無雪不精神<sup>①</sup>

梅有りて雪無ければ精神ならず

有雪無詩俗了人

雪有りて詩無ければ人を俗了す

薄暮詩成天又雪

薄暮詩成つて天又雪ふる

与梅併作十分春

梅と併せ作す十分の春

(方岳「雪梅」より)

II 梅は白き、薄紅梅。一重なるが疾く咲きたるも、重なりたる紅梅の匂ひめでたきも、皆をかし。遅き梅は、桜に咲きあひて、覚えおとり、けおされて、枝にしほみつきたる、心憂し。

(「徒然草」より)

有 梅 無 雪 不 精 神

□(1) — 線①「有梅無雪不精神」に返り点をつけなさい。

□(2) Iの漢詩の三句・四句について、次のように説明するとき、□ A、

Bにあてはまる言葉を、それぞれIの漢詩の中から一字で書きぬきなさい。

薄暗くなり、詩ができあがった頃に再び雪が降り出し、梅と□ Aと□ Bとがそろって、十分に春の趣をかもし出しています。

A □  
B □

□(3) — 線②「けおされて」は「相手のすばらしさに圧倒されて」という意味です。ここでは何が、何に、けおされるのですか。次の□ A、Bに

あてはまる言葉を、それぞれIIの文章中から書きぬきなさい。

□ A が、□ B に、けおされる。

A □

B □

□(4) Iの詩とIIの文章の内容に、最もよく合っているものはどれですか。ア

イ 工から選びなさい。

ア 人と自然の一体感が大切だという教訓を述べている。

イ 自然の豊かさ人と人間のはかなさについて述べている。

ウ 鋭敏な視点でとらえた春の風情について述べている。

エ 春の景色は盛りを過ぎた頃こそ美しいと述べている。

□

5 次の和歌を読んで、あとの問いに答えなさい。

A 人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香にほひ □

紀貫之

B わが園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも □

大伴旅人

(注) いさ…さあ、どうであろうか

□(1) Aの和歌の□に入る言葉として最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

ア けら イ けり ウ ける エ けれ

□

□(2) Bの和歌から枕詞を書きぬきなさい。

□

6 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

むかし、二条の后（むすめ）に仕うまつる男ありけり。女の仕うまつるを、つねに見か  
はして、よばひわたりけり。<sup>①</sup>

「いかでものごしに<sup>②</sup>対面して、おほつかなく思ひつめたること、すこしはるか  
さむ」といひければ、女、いと忍びて、ものごしにあひにけり。物語などして、  
男、

③ ひこ星に恋はまさりぬ天の河へだつる関をいまはやめてよ

この④にめでであひにけり。

〔伊勢物語より〕

〔注〕二条の后：藤原長良女。清和天皇の后

女の仕うまつるを：后にお仕えしている女を

見かはして：顔を見合わせて よばひわたりけり：求婚し続けていた。

いかで：何とかして おほつかなく：待ち遠しい気持ちで

はるかさむ：晴れやかにしたいものです めでて：心ひかれて

□① 〓線「あひにけり」を現代かなづかいに改めなさい。

□② 〓線①「よばひわたりけり」の主語として適当なものを、ア～エから  
選びなさい。

- ア 二条の后 イ 男 ウ 女 エ ひこ星

□③ 〓線②「いかでものごしに対面して」とありますが、男のどのような  
心情を表現していますか。最も適当なものを、ア～オから選びなさい。

- ア 「后」に対する忠誠心が本物であることを示そうと必死になっている。  
イ 「后」に対する思いをどうすることもできず、恋にもだえている。

ウ 「女」を求めるあまり、我を忘れて物事の分別がつかなくなっている。  
エ 「女」の自分に対する気持ちの本物なのかどうかを確かめようとして  
いる。  
オ 「女」に会いたいという、募り募った強い恋心をおさえきれずにいる。

□④ 〓線③「ひこ星に恋はまさりぬ天の河へだつる関をいまはやめてよ」  
について答えなさい。

A 「ひこ星」は日本の七夕に深い関係がありますが、七夕が行われてい  
る月の異名を、ア～シから選びなさい。

- ア 弥生 イ 卯月 ウ 如月 エ 水無月  
オ 葉月 カ 皐月 キ 師走 ク 神無月  
ケ 睦月 コ 文月 サ 霜月 シ 長月

B この歌では「男」のどのような気持ちを伝えようとしていますか。最  
も適当なものを、ア～オから選びなさい。

- ア 自分に会おうとしてくれない「女」に対して憤っているということ。  
イ 「女」への深い愛情が、今や冷めてしまったということ。  
ウ 「女」に対する強い恋心を受け止めてもらいたいということ。  
エ 機嫌を悪くした「女」の気持ちを何とか元に戻そうということ。  
オ しばらく会っていないかった「女」に恋心を抱いているということ。

□⑤ 〓線④に入る言葉として最も適当なものを、ア～オから選びなさい。

- ア 歌 イ 天の河 ウ 物語  
エ 女 オ 二条の后